

Going Global 2012 調査報告 — 要約版

2012年3月31日 v1.31

工学系研究科 国際工学教育推進機構 吉田 眞

注意事項：本報告は、調査実施者による調査内容と現地での体験にもとづいてまとめたものであり、組織の見解では無いことに注意されたい。

要約：

Going Global <http://ihe.britishcouncil.org/going-global> は公益法人 (charity) British Council (以下 BC と略記)の主催であるが、英国政府関係機関の支援の下に定期的開催されている、グローバル教育に関する国際会議である。第1回(2004年)から4回(2010年)まではロンドンで2年毎に開催され、それぞれ Going Global 1~4 と呼ばれている。第1回は55カ国から600人が参加し、第4回には70カ国から1200人の参加と2倍の規模に成長した。

これらの実績を基に2011年からは毎年開催で英国とその他地域の交互開催が原則となった。これにより2011年は香港で「World education: the new powerhouse?」をテーマとして開催され、初めてのアジア開催にも拘わらず、65カ国から1000人を超える参加者があり、主催者によれば「期待以上の成果があった」【1】

【1】吉田：「グローバル教育・実践教育に関する調査報告Ⅱ-Going Global 2011 会議からの動向-」国際工学教育推進機構、2011年3月

今年度の会議はロンドンに戻り、約90カ国から過去最大1500人規模(主催者発表)の参加者があった。今回の会議で特徴的なことは、米国の参加者が増えたこと(これは前回会議からの傾向)、セッションの性格分類が「高等・継続教育(higher education)と職業教育・訓練(vocational education and training)」から、「高等教育(higher education)と技術教育とスキル(technical education and skills)」となったこと、(パネル討論の)会場で常時ビデオ講演を流しておき、特定の時間帯にこの講演についての質疑応答を行う形式(Talking Head)を導入したこと、などである。

本会議の特徴と効果： 高等教育・継続教育に関する政策の策定者と現場の実践者の両者が世界中から一同に会して「グローバル・国際的な教育と連携」について議論する場を提供していることが特徴である。さらに、講演者は、各分野のトップレベルの管理者、運営者、責任者等のオピニオンリーダーが主体であり、細かい議論を行うのではなく大きな方向づけを行うことを意識している。今回は昨年にも増して、「世界・グローバル対地域(文化)」が議論の大きな流れとなっていた。このように、本会議は、「グローバルと教育」の最新動向についての情報をまとめて入手でき、関係者と直接会話ができて調査

ができる格好の場である。

会議としての課題：「言うだけでなく」実効を上げていくには、大きな方向付けと具体的な実践との関係づけが必要である。これについては、参加者同士で特に世界と地域性の観点から議論する「ワールドカフェ」と呼ばれる、ワークショップ形式のセッションがある。これに加えて具体的な実践や提案についての発表はポスターセッションとして用意されており、発表者は、現場の教員、学生など多様である。このポスター発表数は 71 件であり、昨年の 34 件から数が圧倒的に増えている。しかしながら、現状の会議の構成では、高い視点と実践のギャップを直接埋める形とはなっていないと感ぜられる。これを埋めていくには両者をつなぐセッション種別を設けて、規模を拡大する必要があり、管理・運営が課題となる。上述のように、現在は一般セッションの講演数を絞り(それでも数セッションの並列)、実践面はなるべく多くの数をポスター発表で増やす方針と考えられる。一般講演セッションには、学生(学生組合の代表)が参加するセッション、学生意見を中心のセッションも用意されているが、各々1件ずつである。この観点からもトップ運営と現場実践とのギャップを埋めるための仕組みが今後必要と考えられる。

日本の課題：講演テーマと参加者の動向からは、昨年度と同様にあるいは他の会議等と同様に、アジア・中東の成長とアフリカの追走が強く印象に残る。アジア・中東は「自国の自信と先進国から見た市場性」、アフリカは「追いつこうとする気概とこれからの可能性」が、その背景にある。日本では今後さらに、グローバルな世界での日本の高等教育の存在意義を(再)確認し、プレゼンスをどのように確立して発信していくかについて、各大学・関連機関での議論と共有が必要になってくる。例えば、不確定な社会と災害後の様々な課題への取り組みの中で見えてきた視点・知見の総合化が、グローバル世界において共有していく価値の一つになるのではないか。この点に関して、本会議の基調講演でハーバード大学の Homi Bhabha 教授が示した「グローバル市民としての統合性」と「地域文化多様性の最大化」の両方を追求することが、グローバル化の基礎認識として重要となるであろう。

次回の Going Global 会議： 2013 年 3 月 11 日-13 日に、ドバイを予定。

要約版 以上

Going Global 2012 調査報告 — 詳細版 目次

2012年3月31日 v1.3

工学系研究科 国際工学教育推進機構 吉田 眞

目次

要約:	2
第1部 動向のまとめと提言	3
1. 参加者と所属組織	3
2. セッションのテーマと議論	3
3. 参加大学	4
4. 学生の参加	5
5. 日本の課題	5
6. 今後の課題	7
7. 会議からのその他の情報	7
第2部 会議全体の概要	9
1. プログラム等	9
2. 参加者の種類と今回の参加者数	9
3. 会議のテーマ	10
4. 今回の会議キーワード	11
5. セッションの性格分けと数、講演者数	12
6. セッションの形式	12
7. Going Global での情報交流ツール	13
8. 次回の日程	13
第3部 主要セッションの情報	21
1. 開会全体セッション (1、2)	21
2. 全体セッション(基調講演)	21
3. 個別セッション	23
4. 閉会全体セッション (セッション 14. Lasting impressions)	32

以上